

赤瀬川 隼

恋人たちの午後



人たちの午後

川隼

著者略歴

本名・赤瀬川^{はやひこ}隼彦。1931年、三重県四日市市に生まれる。10歳までに、名古屋、横浜、芦屋、門司、大分と転々。大分第一高校卒業。住友銀行、テック(言語教育)等を経て、1982年から作家生活に入る。横浜市在住。主な著書に「消えた外套」「ブラック・ジャパン」「青磁のひと」「球は転々宇宙間」「影のプレーヤー」「潮もかなひぬ」「焼跡の友人」「梶川一行の犯罪」「幻影の街」などがある。

恋人たちの午後

平成元年八月二十日

第一刷

定価はカバーに

表示してあります

著者 赤瀬川 隼

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二
電話代表〇三三二六五―二二二

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

復活の午後	紫陽花	即興曲	冬の旅	時の楽譜	変奏曲	光と影	夏の家族	くら	目次
364	319	278	231	181	137	94	50	5	

装
幀

村
上

豊

恋人たちの午後

産経新聞に昭和62年8月14日より昭和63年8月14日まで連載されたものに加筆訂正をしました。

く
ら
ら

機内はほぼ満席で、すでにほとんどの乗客が着席してシートベルトを締めていた。

ぎりぎりに駆けつけ、やっとのことでもまにあつた伊部彰一は、客の行き来が絶えてステュアデスだけが立っている通路を、自分の席を探しながら進む。心なしか、一方向の大勢の乗客の眼が、一斉に自分に向けられているような気がする。それには軽い非難の眼差しが含まれている。

——おまえか、飛行機の出発を遅らせた奴は……。

運悪く、彰一の席はかなり後ろのほうである。

「大変お待たせいたしました。まもなく出発でございます。今一度シートベルトを……」

柔らかな調子のステュアデスのアナウンスも、彰一への当てつけのようなタイミングで流れた。

やっとたどり着いた席は、二人掛けの窓際である。隣は、頭をきれいな五分刈りにし、薄手のジャンパーを着た若い

男だ。

彰一が着席するとまもなく、飛行機は滑走路に向かって動き出した。彰一はほっと一息入れて機内に眼をやった。

通路を挟んで横に連なる席には、二歳くらいの女の子を抱いた若い女、その向こうに四つくらいの子が坐っている。女の子は母親の胸に顔を預けて眠り込んでいた。

滑走の速度を増した機体が、彰一の尻をふわりと持ち上げる感じを残して離陸した。そのとき、隣の五分刈りの男と、こどもを抱いた女が顔を見合せて何かことばを交わした。

——夫婦だったのか。

梅雨が明けたばかりで、夏休みの観光や里帰りのシーズンには少し間があるが、早目に休みを取っての家族旅行だろうか。東京見物にでも行くのか。それとも、九州への里帰りを終えて東京に帰るところだろうか。

彰一は前を向いたまま、男の職業を想像してみる。眉が濃く、眼が澄んで、なかなかの好男子であり、五分刈り頭といい、いなせな感じである。魚河岸の若大将、板前、それとも大工……とにかく何か手に職を持つ人間にちがいない。こういう仕事は、昔よりは、サラリーマンと比べて相対的に収入も高いと聞く。そうでなくても今は、家族旅行に飛行機を利用するぐらいのことは珍しくない。

彰一は、自分と朋恵が、この夫婦ぐらゐの若さだったころのことを思い出した。そういえば、慧子と達彦がちょうどこの子たちのように小さかったころ、初めて小旅行をしたのだった。もちろん飛行機ではなく電車とバスだった。あのころに比べると飛行機はるかに利用しやすくなったから、小さい子を連れてみずと遠くにらくに旅行できるわけだ。

「彰一は、隣の男に思わず声をかけた。」

「いいですねえ、飛行機で家族旅行ですか」

男は、彰一に顔を向けてゆっくり答えた。

「いや、女房の父親が死んだんです」

「あ……これはどうも」

「彰一は意表をつかれて、しどろもどろになってしまった。」

「すみません、うっかり……」

「いや、いいですよ」

男は、彰一が聞かないのに話し始めた。

「ゆうべ遅く電話が入ったんですよ。それで仕事を休んで行くところです」

博多弁は出てこない。亭主も東京の出なのだろうか。

「そりゃ、大変ですね。お仕事は？」

「博多で板前やってます」

やっぱりそうか。しかし、夫婦とも東京の出だとすると、

なぜ九州で庖丁を使っているのか。腕を見込まれて引き抜かれたのだろうか。それとも、何かわけありの結婚だったのかも知れないな、などとふと思う。

「彰一は、女にそつと眼をやった。身支度も早々にこどもの手を引いて急いで出てきたという感じで、化粧っ気はあまりないが、どこか小粋な顔立ちである。」

「飛行機があるのもよしあしですよ」

男は彰一を話しやすい相手と見たのか、口数が多くなった。

「はあ……」

「あるから、こういうときはどうしても乗ってしまうですよ。飛行機代も馬鹿になりませんよ」

それはそうだ。親子四人で福岡と東京を往復するとなると、大変だ。

「店から前借りですよ」

横の細君が、男にたしなめるような眼を向けた。

「で、お父さんは、おいくつだったんですか」

「六十一です。肝硬変ですよ」

二人のスーツケースには、黒い喪服が入っているのだろう。

「旦那は、出張ですか」

「ええ、福岡で仕事をすませて、東京に帰るところです」

男は彰一の仕事の内容までは聞いてこなかった。スーツにネクタイ、それに皮の手提げ鞆とくればサラリーマンであることは一目瞭然で、そこから先の興味は起きないのだろう。それからしばらく、二人の話は途絶えた。彰一は窓の外に眼をやった。

飛行機は、湿っぽい雲間を抜け出て、さえぎるもののない蒼穹を飛んでいる。

突き抜けるときは、いかにも湿っぽい感じだった雲海も、はるか下にして眺めてみると、からりと乾いた上質の綿を散り敷いたように見える。

しかし、伊部彰一の気持はあまりからりとしていない。福岡での商談がはかばかしく進まなかったばかりか、そのためにぎりぎりに空港に駆けつけて危く乗り遅れるところだったのと、隣の男にへまなことを言ったのと、それに何よりも、おとといの朝、家を出るときまで朋恵との気分がしっくりいかなかったせいだ。

朋恵と派手な口論をしたわけではない。出張の前夜、正確には当日の未明からだだが、どちらからともなく口をきかなくなったのである。

家を朝六時に出て羽田空港に向かわなければならぬのがわかっていたのに、前夜、彰一は会社の帰りにバーくらに寄り、帰宅が午前二時頃になってしまった。

「よりによって朝早いというときに……。気が知れないわ」

朋恵はそう言ったきり、ことばも表情も体の中に仕舞い込んでしまった。

彰一も、くららに長居をするつもりはなかった。ただ、どうもその晩は、青山静子が現われるような気がして、ふと立ち寄ってみたくなったのである。

彼女とは、別に朋恵に隠さなければならぬような関係があるわけではない。たいてい女一人でふらりとくる客で、彰一より一廻りとちょっと若い三十過ぎか。くららでしか話したことはないが、飲んでいて楽しい相手である。顔立ちも垢抜けている。

しかし、その夜の彰一の勤は外れた。静子は姿を現わさなかった。あきらめて早目に引き揚げようとしたところへ、気のおけない常連の飲み友達が一人、二人と姿を現わし、あとは談論風発、時間が経つのを忘れてしまったというわけだ。

彰一は、青山静子のことを朋恵に話したことはない。自分では、会社のことや外でのことを妻にわりあいよく話すほうだと思っているし、週に一度は行くバーくらのことも折に触れて話し、いつか二人で外で食事をした帰りに一度だけ連れて行ったこともある。

だから、青山静子のことも、飲み友達の一人として朋恵に話しておいてもよかったのだが、別にその必要もあるまいと思っているうちにそのままになった。

出張する日の未明に彰一が家に帰ってきたとき、朋恵は夫の表情や素振りから、何か女の気配を感じ取ったのではないか——女と会ったか、あるいは反対に会えなかったために出ている夫の表情を、自分でもはつきりとは掴めないまでも感じ取ったのではないか……。

彰一はちよつとそんな気がした。いきおい、彼も口をきかなくなった。

家を出るとき、「じゃ、行ってくるよ」「行っちゃっしやい」というやりとりも、味も素っ気もないものになった。そしてそのままの状態で彰一は出てきたのである。

禁煙とベルト着用のランプがつき、アナウンスが流れた。

飛行機は羽田に向けて下降し始めたようだ。彰一はいやなことを思い出した。おととい福岡空港に向かったとき、下降の途中で右の耳の奥に激痛が走り、空港を出てからもずっとその痛みが治まらなかつたのである。こんなことは初めてだ。それまでの、一時的に耳がふさがれたような感じとはまったくちがう。今度はどうか。

右の耳が、続いて左の耳が、奥から圧迫を受け始めたよ

うな気がする。やがて右にだけかすかな痛みが頭をもたげてきた。

彰一は、耳たぶを指でつまんで前後に動かしてみる。別にそれでどうなるという見通しも確信もないのだが、ついそういう手つきになってしまう。

はたして、そんなおまじないめいたことは何の効果もなく、痛みは居坐り始めた。彰一はふと思ひ出して、別のおまじないを試みることにした。鞆の中にカセット・プレーヤーと一本の音楽テープが入っていることを思い出したのである。音楽を聞きながら気を散らせば、少しはしのげるかも知れない。

隣の男とは、初めにひとしきりことばを交わしたあととは、これといったやりとりは途絶えている。だから、イヤフォンで両耳をふさいでも、彼との話が退屈になったから遠ざかりたいという意志の表われなどと受け取られずにすむだろう。

「英会話ですか」

意外にも隣の男が久しぶりに声をかけてきた。

「いや、音楽です。おととい、降りるときに急に耳が痛くなつてね、これで気をまぎらそうと」

中年のビジネススマン風の男がカセット・テープを聞き始めれば、まず英会話というのが相場らしいな——彰一は心

中で苦笑いしながら、ステレオ・イヤフォンを耳の穴に差し込んだ。

入っているテープは、一年ほど前にバーくらはで知り合ったピアノリストの石堂杉夫が、最近くれたものである。石堂は今年三十二歳、くらのママの富山靖子の話によると、二十代の最後に、ドイツの何とかいう国際コンクールで二位に入賞し、三十を過ぎてから内外に名の売れ出した遅咲きの逸材とのことだ。彰一が音楽が好きだということを知って、ある晩、石堂が「おひまなときに聞いてみてくれませんか」と言って一本のテープを持ってきた。「演奏会のじゃないんです。オーケストラとのリハーサルでね、通しで弾いたものを録音してもらっておいたんですよ。家で聞いてみると、僕としては本番よりもずっとよくて、納得がいくんです。ノイズが多いけど、一度聞いてみてくださいいよ。コピーだから、さしあげます」

カセットの表面には「ラヴェル ピアノ・コンチェルト 長調」と青インクで走り書きしてある。彰一が聞いたことのない曲だ。それを今度の出張の鞆に入れてきた。

——石堂の入魂の演奏よ、耳の痛みを止めてくれ。

彰一はスイッチを入れた。

突然、耳に、むちで叩かれたような痛みが走った。思わず顔をしかめた。音楽はすぐに、ピッコロと思われる音色

に移り、陽気なメロディーを奏し始めた。しかし、耳の痛みはますます増してくるようである。彰一は冒頭を聞き直してみようと思つて、一旦テープを巻き戻し、おそろるもう一度スイッチを入れた。

ピシッ——むちで叩かれるような感触は、やっぱりこの曲の冒頭の第一音だったのだ。

彰一はどちらかというと、バロックといわれるものやモーツァルトなど古典的な音楽を聞くのが好きで、石堂がくれたこの曲に限らず、ラヴェルにはあまり耳慣れない。

——それにやっぱり、音楽で耳の生理的な痛みが治るわけでもあるまい。むちの音で始まるこの曲は、いつかまたゆっくり聞き直すとしよう。

彰一はイヤフォンを外した。そして隣の男に言った。

「気を散らそうと思つて音楽を聞いてたら、ますますおかしくなつてきた」

「ひどく痛むんですか」

「ええ、右だけなんですけどね」

「耳をふさぐと、かえつてよくないんじゃないですか」

「はあ……なるほど」

考えてみればその通りかも知れない。理由はわからないが、耳の穴をふさいでしまうのはよくなさそうだ。痛みが内にこもるのか。

彰一は、身体の内部の構造や、病氣や怪我のことにまるで暗い。一つには、これといって大きな病氣や怪我をしたことがないせいもある。それに中学生のころから、生物や保健といった科目が得手ではなかった。

隣の男が家族で飛行機に乗っているのが、岳父の通夜に駆けつけるためということは聞いたが、その岳父の死が肝硬変によるものといわれても、どんな病氣なのかほとんどわからない始末である。第一、人間の肝臓がどこにあるのか自分の体に手を当てて示せと、いきなりテストされるとすれば、彰一の手は宙をさ迷うばかりである。どういう役目を果たしているのかと聞かれても、たしか血液の成分や胆汁に関係があるのだったなど思い出す程度で、とてもしつかりとは答えられない。「耳の役目は？」「そりや、音を聞くためにあるんでしょう」とは言えても、内部の構造がどうなっているのかなど、考えたこともない。

「肝硬変って、痛いんでしょうね」

彰一は、隣の男に思わずそんなことを言ってしまった。

男は、耳の話から急に肝臓の話に飛んだせいかわ、澄んだ眼を一瞬彰一に向けて、それから前を向いてゆっくりとした口調で答えた。

「そりや、進めば痛いでしょう。特に、おやじの場合は、最後は食道静脈瘤の破裂ですからね」

「はあ……」

彰一にとっては、いきなりすごい語感に襲われたという感じである。「食道静脈瘤」「破裂」――。

「しかし、肝硬変というのは、気をつけて検査を受けないと、本人も自覚症状のないまま進んでいることが多いそうですよ。おやじもね、急性肝炎を一度やったあと、すっかり治ったと思って通院をやめたんです。ということは、そのころは、どこも痛くなかったんでしょう」

「テレビや新聞で見ると、最近よく有名人の死で、肝臓の病氣が多いようですね」

「飽食の時代ですよ」

博多で板前をやっているという男が、「飽食の時代」を口にした。

「急性を完治させないままでおくと慢性になりやすいですよ。肝臓に限りませんけどね。そのうちに、痛くもないから気がつかないうちに、肝臓が硬くなって血の巡りが悪くなるんですよ」

「ああ、それで肝硬変というんですか」

「ええ、それから肝臓に行きにくくなった血液が、食道の静脈のまわりにたまり、瘤になって破裂するケースが多いそうです。おやじもそうでした」

「そうなる、痛いわけですね」

「でしようね。だけど、おやじの場合はもう、意識が混濁してたというから、痛みは長くはなかったかも知れませんが、六十一にしては早過ぎると思うんですけどね」

彰一は男とやりとりしながら、「痛い」ということにしか関心を向けていない自分に気が付き、いかにも幼稚な感じがして、男に対して少し恥ずかしくなった。

ゴトンと尻に手応えがあつて、飛行機が着陸を告げた。

それは彰一にいつものように安堵をもたらしたが、右耳の痛みはなかなか引いてくれない。音楽で失敗したので、今度は男と、話し続けることで気をまぎらそうと思った。

「板前というのは、真魚板の前で庖丁を使う資格がある人のことで、一種の敬称だそうですね」

「さあ、どうですかね」

「博多のお店の名は何というんですか」

「菊乃井という店です」

「ほう、何だか高そうな感じだな。われわれにはちょっと無理かな」

「そんなことありませんよ。東中洲のね、小さな料理屋です」

「東中洲といえば、高い店が多いですよ」

「今度出張されたら、寄ってくださいよ。サービスしますよ」

「ありがとう。お名前は？」

「梶木といいます」

「そこまで話が進んだので、彰一も名刺を出した。」

「永井建設工業株式会社、営業第二部長 伊部彰一」

「やあ、大企業ですね」

「いやいや、会社は大きくても、個人は関係ありませんよ」

「そんなことない。絶対ない」

梶木は断定的に言つた。その声色には、何か彰一の言い方に対する怒りとも非難ともとれる気持が淡くにじみ出ているように、彰一には思えた。

「いや、さっき梶木さんは飽食の時代とおっしゃったけど、少なくとも飽食はしてませんよ」

「それは、旦那がそう思つてるだけの話ですよ」

人びとの列が通路にずらりと立ち並んだ。梶木と名乗つた男は、横の細君に、人の列が切れるまであわてずに坐つていのように指図している。

「食生活というものはね、社会全体の水準というか傾向が、家庭や個人をほつてはおかないものなんですよ」

この男、三十半ばぐらいと思えるが、初対面の彰一にも、なかなかはっきり意見を言う板前だ。菊乃井という料理屋、つまり彼の職場でも、客にとって手強い相手かも知れない。頑固一徹というふうには見えないが、ある種の職人氣質の

ようなものが伝わってくる。

「なるほど、で、その現在の水準が飽食だと……？」

「ええ、しかし、本当にうまいものやいいものを食べてるといふんじゃありませんよ。何ていうか、食べ物を馬鹿にしてるんです。それにね、全体に浮気心がついてる」

「浮気ねえ……。そういう傾向を、お店で庖丁使つて感じるわけですね」

「感じますね。その点では東京も博多ありませんよ」

「東京でやつてらしたんでしょ」

「ええ、五年ほど前まで」

やつぱり、そうだった。ということは、あの男の子は多分、博多に行つてから生まれたのだろう。

ようやく、通路の人の列が途切れ始めた。梶木が家族を促し、彰一も立ち上がった。

「耳は治りましたか」

「いや、すぎすぎしたままです。これで二度目なんです」

「診てもらつたほうがいいですよ」

「そうしましょう。齒の手入れがやっと終わったと思つたら、今度は耳。体にガタが来始めたようだな」

「失礼ですが、おいくつですか」

「四十六です」

「じゃ、私とちょうど一廻りですね」

「そうですか、辰年ですか」

構内バスを降り、到着ロビーに入るところで別れた。彰一は手提げ鞆一つだが、梶木は荷物を預けてあるという。

「お世話になりました」

細君が彰一に頭を下げた。

「いや、とんでもない、こちらこそ」

——いい男だったな。

これほど自分と隔たつた職業の男と話したことは久しぶりである。

一人になつて歩き出すと、急にまた右耳の痛みを直接感じるようになった。歩くにつれて、キチキチとかキンキンとかいう音まで耳の奥で鳴っているような気がする。

時刻は午後七時、今日は会社に寄る用事はない。彰一は、横浜駅への直行バスの停留所に向かった。家は、京浜急行沿線の上大岡にある。

停留所に歩き出して、彰一は足をとめた。

——くららに寄つて行こうか……。

酒でも飲んでいれば、少しは耳の痛みも柔らぐかも知れない。もちろん何の根拠もなかったし、そんな感じがしたわけではなかった。そう思おうとしたまでである。

酒を飲んで治るくらいなら、家に帰つて飲めばよい。それより早く喉をうるおしたいなら、この羽田空港でも飲め

る店はある。

しかし結局、彰一の足はモノレールへの階段を降りていった。パークからは、渋谷駅の南の桜丘という、殷賑をきわめる渋谷駅界隈の中では比較的静かな町の、小さなビルの地下にある。彰一の会社は、そこから玉川通りに出て坂を五分ほど上がったところである。

モノレールの切符を買ってから、家に電話を入れた。

「ちょっと、会社に寄ってから帰る」

「そう、じゃ、遅くなるわね」

「今からだから、そうだな、仕事を一時間で片付けるとして、十時かな」

「わかりました」

朋恵の声を聞いて、何となくほっとした。と同時に、ますます帰ることにしてもよかったなと思った。電話でもほとんど口をきかないほど、朋恵がまだ、おとといの朝の不機嫌な、もつれた気分のままでいるのではないかと思っていたのだ。声の様子では、いつもの明るさに戻っているようだ。

こういう場合、まずどちらから声をかけるかということが大問題である。先にかけたほうが自分の非を認めたことになりがちだ。だから、直接相手への用事で声をかけることはお互いに避ける。たとえば、こどもの用事が話題につ

いて、二人がそれぞれこどもと口をきき、それが何かの弾みで二人のやりとりになるといった解決の仕方が一番いい。今まで何回となくおちいった夫婦間の黙秘状態は、たいていはそういう過程で、いつのまにかまた普通に口をきき合う状態に戻っていた。

次にいいのは、こういう場合の電話である。何日かの出張から帰って飛行機を降りたとき、妻に電話をかけるのは、かならずしもテキの軍門に降ったことにはなるまい。そこで愛を示すことばでも入れば別だが、「今、空港だけど、何かあったか」ぐらいなら、必要で淡白な事務連絡に属する。これに対して、妻も何か言わねばならない。こうして両者が一声ずつ発したことになる。その段階ではお互いにまだ冷淡でも、必要に迫られて声をかけ合ったということが大事なのである。顔が見えないから、わりあいスムーズにでき、そのスムーズな空気の中に、和解の種子が目に見えない分子となって入り込むのである。

さて、彰一は、ともかく今度も電話がそういう役に立ったのを感じて、モノレールに乗った。「会社に寄る」という嘘をついたことが、ちょっと後ろめたいが。

パークからのドアを押すと、カウンターの止まり木の人影が振り向いた。青山静子だ。

「お久しぶり」

静子のほうから声をかけてきた。

「そうですね。一カ月ぶりくらいかな」

カウンターのL字型になっていて席は七、八人分、その後ろの、わりあいゆったりしたスペースにテーブルが三つほどあり、今は一番奥のテーブルに、彰一の知らない客が四人いて小声で話し合っている。カウンターの席は静子だけで、L字の角にいる。

彰一は、もう一つの角の止まり木に腰を降ろした。その二つの席の間が、店の人が行き来する五〇センチほどの幅の狭い通路になっている。

その位置を占めたことによって、彰一は青山静子に適当な距離を置いたつもりである。同時に、横に隣合って腰掛けたのでは見えない彼女の容姿を、斜めに向き合うことで自然に視野に入れることができるのだった。

「お二人が見える日は一致しないことが多いわね」

ママの富山靖子が、彰一のボトルを出して氷や水の準備をしながら言う。

「残念ながらね」

「今日は、会社、わりと早いですね」

「いや、出張帰りだね、さっき人質から解放されて羽田からきたところ」

「えー ハイジャック？」

ママが大声を出したので、奥のテーブルの客まで驚いた顔を彰一に向けた。

「いや、そうじゃないけどね、僕は飛行機に乗る度にね、集団で人質になった気持になるんだ。別にハイジャックされそうだという意味じゃなくてね」

「びっくりさせないでよ」

「ごめんごめん」

彰一は靖子に謝りながら、その気持を説明し始めた。

飛行機、特に大型旅客機では、大勢の人間が身動きできないほどの狭い座席に押し込まれ、一様にシートベルトを締めて一方を向いている。窓は小さく、どんなことがあっても開かないし、その小さい窓から見える空間は、地上や水上を走る乗物から見える風景とは異なり、人間の普通の生活空間から隔絶されたものである。加えて、飛行の原理や機体についての知識、それに何よりも操縦の技術において、われわれ普通の人間は、地上水上の乗物に遠く及ばない。

「つまり、身動きできないようにさせられたうえで、運命はすべてパイロットという異能の者に握られている。その大勢の乗客がね、ときどきふと、みんな人質に見えてくるんだ。それに、飛行機の中では、みんなわりあい黙り込ん